

氏名	榑山陽子
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第1号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題目	学位論文題目 ディクシヨンの視点によるヘンデル《メサイア》研究 ——ヘンデルの歌詞付けの正当性——
論文審査委員	主査 教授 井上 さつき 副査 教授 久留 智之 副査 教授 増山 賢治 副査 教授 戸山 俊樹 外部審査員 教授 太田 聡

1 学位論文の要旨

G. F. ヘンデル (George Frideric Handel, 1685-1759) の《メサイア *Messiah*》(1741) の歌詞付けについては、作曲当時から、作曲者がドイツ出身であるがゆえに英語の理解が足りず、歌詞の扱い方が不自然であるとされ、度々修正が加えられている。

近年になって漸く、ヘンデル研究者のドナルド・バロウズ (Donald Burrows, 1945-) のように、ヘンデルの歌詞付けの方法を肯定する見解も見られるようになった。バロウズは、現在の人々に理解不能なことでも当時は間違いではなかったのだと考え、それを前提として、ヘンデルの表現の意図を解明しようとしている。しかし、なぜヘンデルの方法を肯定できるのかは、解明されていない。

ヘンデルが移住したころのイギリスの英語に目を移してみると、当時、綴りは現代とほとんど変わらなくなっていたが、発音はまだ現代と異なるものが多かった。そして、英語特有の大きな発音変化は収束しつつあったが、まだ多くの語は発音変化の途上であり、その変化の様々な段階の発音が同時に存在していて、非常に流動的であった。

本論文では、このような当時の英語の実態を把握した上で、英語史の研究成果に基づき歌詞テキストの発音の考察をし、複数の発音の可能性があるとされる箇所については、楽譜に書かれた音楽情報、即ち、旋律の音型・リズム・抑揚や音節の音価の割り振り方を基に分析を行い、発音候補の絞り込みを行う、という方法で、ヘンデルの想定したディクシオンを復元し、ヘンデルの歌詞付けの正当性について実証することを目的とする。

本論文は4章から構成される。第1章では、ヘンデルの歌詞付けの特異性について、ヘンデルの時代から現代まで、《メサイア》に関わった人々が、どのような点に着目し、どのように理解し対応していたのかを調べ、《メサイア》における歌詞付けへの関心が時代を追ってどのように変化してきたのかを考察した。その扱いのパターンは大きく2

分類された。

まず第 1 は、作曲当時は認められていたが、後の人々には受け入れがたく感じられるようになった歌詞付けである。これについては、語の音節数や強勢が現在の認識と異なる点と、イタリア歌曲の連声の技法が使われていることの 2 種類が挙げられる。語の音節数や強勢が現在の認識と異なる点については、作曲当時の英語に従ってヘンデルが歌詞付けをしたが、時が経ち発音が変わったため、後の人々からはヘンデルの英語が間違っているように感じられたものである。社会の担い手が貴族から市民へと移っていく時代で、標準となる言葉の発音や強勢が変化の途上にあったことも一因とみられる。連声の技法については、作曲当時はこの技法の導入が受け入れられていたが、後の時代の人々には、歌い易さが優先され、この技法が受け入れられなくなったと考えられる。

第 2 は、ヘンデルの作曲当時から変更が提案されていた歌詞付けで、ヘンデルが提案を受け入れた場合と却下した場合とがある。これには、拍の強弱と単語の関係が合わない点が挙げられる。この場合は発音の変化によるのではなく、ヘンデルが効果的な表現を試行錯誤していたことによると考えられる。後の人々は自筆譜にある最初の案をオリジナル版として採用する傾向があるが、最近では再考後変更して指揮譜に書かれた案を採用する場合も見られる。再考もヘンデルの考えであるので、再考後の楽譜を採用する方がヘンデルの意向に沿っているとも考えられる。

《メサイア》は、作曲直後から常に人々に演奏されて伝えられてきたことから、時代の流行などに合わせて変更された演奏方法が、繰り返され一般に定着していった。19 世紀末に研究者達が原典に立ち返ろうとした時に、その演奏方法との兼ね合いを考えるとこの段階が必要であったことも、《メサイア》の歌詞付けについて、ヘンデルの意図に沿って考えることを妨げていた要因と考察される。

第 2 章では、ヘンデルがイギリスに移住した頃の英語の状況について、主に英語学の側からアプローチをして考察した。まず英語の歴史と発音変化の変遷を概観した。英語は 15 世紀から 17 世紀を中心に発音が大きく変化し、18 世紀には、まだその変化の途上である語が多く、現在と異なる、変化の様々な段階の形が存在していたことを確認した。発音の変化には、時代的要素、地域的差異の他、当時は貴族から市民へと社会の中心が移りつつある時代であったことに鑑み、階級による発音の差異等も考慮する必要があることを確認した。さらに《メサイア》の歌詞を扱うにあたり、欽定訳聖書の発音を検討し、当時の歌唱における発音に対する考え方も考察した。

そして、検討した 18 世紀の英語の発音の状況を踏まえて、《メサイア》全体のディクシオンを復元するための、発音に関する指針を設定した。

第 3 章では、第 2 章で設定した復元の指針に従い、さらに、英語学の研究から複数の発音の可能性があると考えられる箇所については、旋律の音型・リズム・抑揚や音節の音価の割り振り方などの音楽情報を基に分析を行い、発音候補を絞り込むことにより、《メサイア》のディクシオンの復元を試行した。そして、特徴的な歌詞付けの部分についての分析により、ヘンデルの発音は、当時の発音の中では概ね古い伝統的・保守的な発音であることが明らかになった。

次に、ディクシオンという視点からヴァージョンの相違について検討することにより、英語がネイティブでない歌手にはヘンデルの想定した英語のディクシオンに従わせ

たこと、役柄が定着している歌手にはその役柄のイメージに合わせたディクシオンを考
えて作曲したこと、公演先で選んだキャストにはそのディクシオンを容認していたこ
と、などのヘンデルの意図を明らかにした。さらに、ディクシオンの視点から考察する
ことにより、作曲した時期、演奏した歌手や会場、聴衆の受け取り方について手掛かり
が得られることも明らかになった。

また、英語に関しても、まさにこの時期に発音変化のどの段階にあるのかが分かる語
があること、変化の途中の段階の形が存在したこと、などの知見が得られた。

そして、第 1 章から第 3 章まで検討してきた、ヘンデルの想定したディクシオンと
いう視点から、第 1 章でまとめたヘンデルの歌詞付けの特異性の問題について再検討
することにより、ヘンデルは、《メサイア》作曲時に実在していた英語の発音や強勢に
忠実に従って歌詞付けをしていたことが明らかになった。実は、ヘンデルは英語の発音
や強勢に関しては、間違っていなかったということが実証されたのである。

第 4 章では、作成したディクシオン復元の指針と照らし合わせて、第 3 章で分析し
た手法により、《メサイア》全曲について、そのディクシオンを復元した。その結果、
ヘンデルのディクシオンは、現代のディクシオンと異なる箇所が多いことが明らかにな
り、歌詞付け研究において発音の違いを考慮に入れる必要性が改めて確認された。

以上のように、ディクシオンという視点から《メサイア》の歌詞付けを検討すること
により、ヘンデルは、言葉について繊細な意識を持ち、宮廷の英語、市民の英語を正し
く理解していて、作曲に際して、試行錯誤しながら、発音も含めた言葉の表現の可能
性を常に追求していた、ということが明らかになった。ヘンデルは、歌詞付けに当たり、
音楽優先、歌詞優先という考え方をしていたのではなく、英語の正しい理解に基づき、
歌詞と音楽との相互の働きかけによる効果を狙って作曲していたのだと考えられる。

2 学位論文審査の要旨

本論文は、ヘンデルの《メサイア》の歌詞付けについて、当時のディクシオン〔歌詞
の発音法〕という観点から再考する試みである。ヘンデルの《メサイア》の歌詞付けは
従来多くの人々に不自然だと批判されてきたが、本論文は、その歌詞付けの正統性や意
図を、音楽学からのアプローチだけでなく、英語学（英語史）の研究成果も参照しなが
ら詳細に検討した力作であり、ヘンデルが言葉に対して繊細な意識と広い知識を備えて
いたことを明らかにすることにも成功している。

英語史においては 16 世紀から 18 世紀にかけて大きな発音の変化が起こっていたが、
当時のディクシオンを推定する音楽学のアプローチだけで検証することは不可能であ
る。本論文ではそこに英語学の成果を取り入れ、英語史研究の分野で解明されている当
時の英語の発音・綴り等についての知見を《メサイア》の歌詞付けの研究に適用し、そ
れによって作曲当時の状況を明らかにし、さらに、発音変化に関する英語の音韻史の研
究成果を、楽譜に現れている音楽的な要素と照らし合わせることにより、ヘンデル自身
が想定していたディクシオンの復元を試みている。

論文全体は全 4 章から構成されている。第 1 章では、音楽学の立場から、ヘンデルの
歌詞付けの特異性が楽譜出版者や研究者たちによって、作曲者の存命中から現在に至る

までどのように扱われてきたかを整理し、歌詞付けへの関心が、時代によって変化してきたことを明らかにしている。

第2章では、英語学の立場から、当時の英語の状況について考察している。英語の歴史や発音の変遷を概観した後、18世紀に焦点を絞り、さらに、欽定訳聖書の発音や演奏習慣等、副次的な要素も考慮にいれながら、《メサイア》のディクシオンを復元するための指針を設定している。

第3章では、ここまで整理した音楽学のアプローチと英語学のアプローチを組み合わせ、《メサイア》のディクシオンの特徴を複合的な観点から検討している。

第4章では、以上の考察に基づき、《メサイア》の全曲について、作曲当時のディクシオンを推定し、復元を試みている。

このように、本論文は、前半においては、音楽学と英語学のそれぞれの先行研究の概観、問題点の指摘などを行い、後半においてそれらに基づく考察を経て、最後にユニークな結論を導き出している。

18世紀の作品のオーセンティックな演奏をめざして、たとえばピリオド楽器を使用することは、現在ごく当り前に行われているが、ディクシオンのオーセンティシティに関してはこれまでほとんど問題にされてこなかった。本論文は、ヘンデルの《メサイア》という、クラシック音楽の重要なレパートリーである作品に関して、ディクシオンという観点から、学際的で斬新なアプローチで復元を試みたものであり、ユニークな手法が高く評価された。

このディクシオンの研究を契機として、当時の発声法やホールの音響、編成等との関係性についてのオーセンティックな解釈全般の研究へと広がっていくことが期待されるという意見もあった。

昔の発音やアクセントを推定する場合、従来の英語学の研究では、綴り字と押韻関係や正音学者たちの記述を基にすることが主であったが、本論文は楽曲のディクシオンに注目して、楽譜から得られる音の高さや長さ、リズムや音符の数などの情報を基に、当時の発音をある程度推定するもので、音楽学の成果を英語学に応用する研究の可能性を示唆した点でも画期的である。今後、他の作品や作曲家にも対象を広げて、より包括的で深い分析が行われれば、古い音価を推定する新しい手法の確立へとつながり、音楽学および英語学の双方に多大な貢献をする可能性がある。

この研究に基づいた実際の演奏が行われ、実践を積み重ねること、また、英国での研究成果の発表も強く望まれる。さらに、演奏家のために、《メサイア》のディクシオンの複数の可能性を示した、より簡潔な指針をまとまった形で示してほしいという要望もあった。

本論文の問題点としては、発音の推定の根拠に若干弱い部分があることが挙げられる。たとえば、「緊張が持続する場合は単母音、緊張が緩む場合は二重母音になる」などの推察が妥当かどうか、また単なる印象論ではないことを、音楽分析可視化ソフトを用いて証明すべきであろうという意見があった。

また、本文や注において、ほぼ同じ内容の記述が複数現れるため、冗長に感じられる部分がある。

なお、本論文にもその内容が一部組み込まれている靄山(2012)「初期近代英語期の

声楽作品による当時の発音の推定」により、筆者は平成 24 年度近代英語協会優秀学術奨励賞を受賞し、その研究が英語学関係の学会においてもすでに高い評価を得ていることは特筆に値する。

以上から、本論文は音楽学と英語学にとってユニークな労作であり、博士の学位を与えるのに十分であると結論した。